

寺島珠雄書誌目録刊行会会報

第一号

二〇一一年一月一日五日発行 発行人 中岡光次 編集人 前田年昭 連絡先 岡山県赤磐市沼田四六八一(〒七〇九一〇八一)

寺島珠雄書誌目録刊行会設立へのお願い

「寺島珠雄書誌目録刊行会」を設立します。

その趣旨は埋もれつつある寺島珠雄という存在をあきらかにし、その仕事・業績を多くの人たちと共有するための「書誌目録」作成に向けて、情報の交換・会員相互の交流をはかるものとし、資料収集のための資金管理を行います。

ここでいう「資料」とは、故人が遺した著作物のみならず、故人および故人の著作を取り扱ったもの、写真、手紙、メモなども含め故人に関する一切のものをいいます。

「刊行会」により作成された「寺島珠雄書誌目録」及び収集された個別の書誌は、社会福祉法人大阪自彊館あいりん資料室に寄贈され、故人の著作権管理者である「寺島珠雄事務所」と連携協議のうえ、一般に公開されることとなります。

【寺島珠雄書誌目録】第一次の末尾《あとがき》に記しましたように、完結篇に向けて

の資料収集は故人の知己・関係者等の方々に頼らざるを得ない段階に入りました。そして関東方面におけるまだ手つかずの大木一治関係資料もかなりあつて(千葉新聞、じんみん新聞等)その現地調査も控えています。情報を他者に頼らざるをえない問題とともに、その資金を調達していかねばならないという実に深刻な問題があります。

幸い関東方面における調査活動については人材も確保され、関西方面においても実務協力者が増えることになっているのですが、そのほとんどがそれぞれ生き方が下手な人間ばかりで、立派に貧乏しております。そこで「寺島珠雄書誌目録刊行会」を設立することになりました。

「刊行会」は故人が遺した書誌類を収集し、「あいりん資料室」に寄贈するまでの活動を円滑に進めることがその第一の目的であり、同時に必要不可欠な協賛金を募

集するための窓口役を果たすことになりま

す。「あいりん資料室」は資料収集等の活動には関与せず、「刊行会」から寄贈された資料群をデータベース化するなどの作業を通じて整理保管し、希望者への提供を行う機関として限定されます。したがって「あいりん資料室」は協賛金の募集に関与することはありません。

《会規約》の要旨

- ① 会の住所は従前の関係から中岡光次宅に置き事務局とし、中岡がその代表をつとめ、資料の集約を行います。各部門の担当者は随時決定されます。
- ② 会員は千円以上の協賛金を支払われた方が、希望されない場合を除き、自動的に登録されます。定期的、定額的な会費は設定しない方針です。
- ③ 寄せられた協賛金・カンパは、複写料等の実費補填とともに、収集不可能な書誌類を古書店から購入する際の資金等に充当されます。

④ 『会報』を適宜発行し、会員に送付し

ます。資料の収集状況・会計報告を掲

日本アナキズム運動人名事典編集についてのハガキ2通 寺島珠雄

日本アナキズム運動人名事典編集委ニュース①(『日本アナキズム運動人名事典』編集委員会、発行日一九九八年二月二八日)掲載

■一九九八年一月二三日

次のことを参考までに。

① 辞典制作に参加する各自は、記述する

対象人物を早く確定し、そのリストを総合

的に作って配付、検討の上、さらによい記

述担当者が発見できたら、こだわらずに交代すること。

② 記述者に対して、その記述量による財

政負担を求めないことが原則として確立さ

れるように希望。つまり財政活動は原則と

して独立におこなわれる態勢を作る必要が

ある。多く書けば多くカネを出すというこ

とでは、少ししか書かない。全然書かない、

というように記述意欲がすばまって行く。

これは私自身の実感。

③ 記述内容、文体について相当程度に整

合性がほしい。個性尊重してなお。そこま

で見渡す編集を希望。思い入れの冗漫な作

文を排除したい。

④ ただし私は来年一月末までと約束した

仕事があるので、それがすむまでは実動不

能。約束すみの田村栄のみは書こうという

気分。

なるべく万全のないものを書くという

以外のことは私はできません。

■一九九八年一月二五日付

前のがきに追加します。

(A) 事典の収録範囲について、例の大事典は昭和戦中までで区切っていたと思います。

それと同じ時代区分なのか。もつと戦後ま

でとり入れるのか、その問題。戦後もとり

入れるとした場合、生存者と故人との区分

はどうなるか。生存者は将来的には評価が

変わる可能性がある。故人ならその心配は

ない。ただし、それでも新しい調べをして

いると、われわれの事典がいつ完成するか、

見通し立たず。

(B) 右の(A)と関連のこと。われわれの

作ろうとしている事典は、例の大事典のア

ナキズム関係のみの訂正増補版なのか、まっ

たく新しいものなのか、この点の共通見解

をまとめる必要がある。それと、萩原晋太

郎が全面的に真剣に反省謝罪した場合、彼

をどうするかも小さな話題にどうぞ。

載します。会員各位からの投稿を期待

して情報交換・交流の場とし、収集資

料の内容公開なども行う予定です。最

終的に会員には【寺島珠雄書誌目録】

(寺島珠雄年譜付き完結篇・非完品)が

送付されます。

⑤ 「刊行会」の存続は一年を目途とし、

【寺島珠雄書誌目録】(完結篇)発行を

もって清算・解散するものとします。

会の設立は平成二三年一〇月一〇日

です。

本会の趣旨にご理解・賛同をいただき、

できるだけ多くの方のご協力をお願いする

次第です。

設立発起人

前田年昭 松繁逸夫 中岡光次

平成二三年一〇月一〇日

〒709-0812 岡山県赤磐市沼田4

68-1 寺島珠雄書誌目録刊行会

電話080-5617-6669

ファクシミリ086-955-6291

ゆうちょ銀行振替口座番号 01330-

5-55266

口座加入者名義 寺島珠雄書誌目録刊行会

●

逸見吉三さんと寺島さん

西村修

寺島さんといえば、大阪・釜ヶ崎。大阪といえば逸見吉三さんがまず浮かぶ。

存在感の大ききで二人は似ていた。小柄で腕っぶしが強い。

広い額に大きな目。その目が、人なつこく笑う。言葉は辛辣だが、言葉の裏に粘っこい毒がない。

違いといえば、ズブズブの大阪弁と、何やら訛りの混ざった関東弁。この差は大きい。

大阪での尊敬する先輩として、新たに寺島さんが加わった頃、私は大阪を引き上げて京都に帰っていた。(と思う)

寺島さんとは、よくボクシングの話をした。京都の小さなジムで、私は「セコンド」を努めていたからだ。

若い選手たちを育て、いた、といえは聞こえはいいが、その才能も技術も私にはない。

高校の番長や、母親に連れら

が、遂に時間切れとなってある決断を京都に伝え、後はま、よ、とグイグイ呑みだした。

引つ込み思案」の若者や、ボクサーを目指す職人見習い君に混ざって、一緒に汗を流していたということである。

専門ではない。ジムではトレーナーもコーチも皆んな自前。ジムの会長に誘われ、仲間に加わったのは、それまでの夜

は酒びたりの生活を一変する必要が、私の内部事情としてあったから……。

ボクシング云々の話は、長くなるのでここで切る。

ある相談事があつて、寺島さんを訪ねたが不在。待ち続けた

『釜ヶ崎 旅の宿りの長い町』の「負けるということ」に酒場の一風景として私(N)やIが影絵になつて登場していることを、ずい分とあとになつて私は知った。

仕事に絡んだ出来事が新聞記事になつており、というより新聞が首を突つ込んできた事で、話が大きくなった。

私はさらに闘うか、やめるか……。進むか、退くかの決断を迫られていたのである。

「退く」と電話で伝え、応援にかけつけてくれていた人たちがつかかりさせていた。

私こそ、心底、ガックリ来ていた。

そんな頃合いになつて、フラリと寺島さんが酒場に現れた。「よつ」と、いつもの快活な相槌で。

大阪の二人の先輩、逸見さんと寺島さんには決定的な違いがある。逸見さんは書かない、うたわれない人。寺島さんは書く人だ。

本の内容を知った後も、寺島さんからんだ時の事情について話をすることがない。

負け戦を、自分に言いわけするには、時間がかゝつたのだ。

断片・寺島珠雄(一)

使わなかつた《享年》という言葉

中岡光次

それは私が二十二歳の時、計算してみれば寺島珠雄が四十八

あつた。遡れば四十年近くも昔のことである。

私は寺島珠雄に罵倒された。

「俺は『享年』という言葉は使わない」と吐き捨てるように叩きつけられたから罵倒という言葉は適切ではないのかも知れない。しかし私にとっては罵倒以外のなにものでもなかつたし、余りにも唐突なことだつたから

うろたえるしかなかった。

ある時寺島が私の住まいを訪ねて、推薦しておいたからやってみたらいいと言う。朝日ジャーナルから連載の依頼があったが、今それを書く適任者は君以外にないような気がしたので、そう言っておいたから、近いうちに間違いなく依頼があるぞ、というのである。「現場から」というシリーズもので、五

を寺島に見せたらケラケラ笑うのである。「上手い文章を書くことと思うな。思ったことを思ったとおりに素直に書けばそれでいいのだ。今まで書いてきているじゃないか」という。なんとか合格点をもたらえるようになったのは、約束の締め切り日をとくに過ぎたころであった。またもや寺島がジャーナルの担当者を引き連れて私を訪ねてきた。

ときのその部屋だという。部屋の調度家具にはサントリーオールドが二本も備えられていた。当時私は日本酒一本鎗でウイスキーを飲むことはなかった。私の舌にしみこんでいるのは高校時代のサントリーレッドである。「飲んでもいいのですが、わかってきていますよね」。すみませんわかっていませんでした。

最終稿料一回分は寺島用にとつてあった。いつも吞ませてもらうだけの「八兵衛」に先回りして三万円を預けての部屋訪問であった。「てらさん、吞みましょうや」とさそっても動かない。みるみる寺島の顔が紅潮し、吐き捨てるように言う。「おれは享年という言葉は使わない」

回連載で一回二十枚、稿料は一枚二千元という破格なものであった。当時は日雇い土方の懲役労働が日当二千五百円前後であったから、その稿料の高さは尻込みするに充分である。第一稿料をもらって文章を書くことなど考えもしていなかった。

寺島は何も言わなかった。川崎という名前だったと思うが、切々と訴えるのである。次とその次とまたその次の書き手にお願いして繰り上げて書いても願っている。もう時間の猶予はらっていない。東京に来て、缶詰めになつて書いてもらうしかないというのである。

深夜用の肴はまかない程度の卵焼きや残り物を事前に頼めばいやな顔もせずに整えてくれる。原稿はほとんどでき上がっているからおかまいなしの天国気分であった。寺島もそのことはうすうすわかっていたはずだ。五回目の最終回に、ある労働者の死をとりあげ、群馬から出てきた父親の言葉を私なりの関東弁で書いたが、「こいつはひでえや」ときちんとした群馬弁に直してくれたのは寺島だった。

「だつて享年という言葉は天から授けられたという意味だろうが」
「釜ヶ崎」の現場から⑤ 安住の地としての死」の最後を私は次のように締めくくっていた。「過去、真面目な労働者であったはずの彼は、享年三〇であった。」

そりや無理ですわ、自信がありません、といつても聞いてもえなかつた。そうこうしているうちに寺島がジャーナルの担当者を引き連れてやってきて、

もうほとんど書き上がっていることは内緒にして軟禁生活を表向き受け入れることにした。あてがわれた旅館の一室は私にふさわしい部屋であるという。

反戦自衛官をかくまったとしてジャーナルが手入れをくらつた。ただなぜ、その時に言ってくれなかつたのかと思う。

釜ヶ崎には「くすぶり」という連中がいて、労働意欲などと

やはり書けなかつた。一回分

ジャーナルが手入れをくらつた

ただなぜ、その時に言ってくれなかつたのかと思う。

釜ヶ崎には「くすぶり」という連中がいて、労働意欲などと

は隔絶して、冬であればセンターなどの軒下で焼酎などを回し呑みし、もっぱらたき火にあたって一日を過ごす。煤だらけの顔はくすぶっているのである。三〇歳の男は通りがかった活動家によって救急搬送されたが病院に着くまでもなく命絶えた。男が残したものは、神戸に

に怒ったりするんかな。そんな大人気ない人と違うと思うてたけど」という。そんな言い方をされる私がよほど悪いことをしたように思えるではないか。まづい酒は呑むべきではない。「て

を店に預けたのだった。竹島さんととはたらさんに輪をかけて世話好きであった竹島昌威知で地元名士であったから名字+さん付けで丁寧と呼ばれていた。

などという美味しい仕事はそうあるものでもない。それを実にあっさりとして私に押し譲った寺島の真意はどこにあつたのか、今そのことを思う。

て四国の実家の電話番号を記した紙切れ一枚であつた。

私を流しながらこの最後を書いたように記憶している。文章最後の着地としての「享年」という言葉は好適であり、なんの疑問ももっていないかつた。

寺島は寺島で言い過ぎたと思つたのだから、しばらくして「呑もうや」と言ってきた。それ

なものがあつて、次の段階に具体的に結実する何かを見通す能力があつたと思うのである。私を含めて若者に対する配慮にそう思えることがいくつあつた。

八兵衛のおかあは一人で呑みにきた私の態度を心配して「てらさんどうしたん」という。「てらさんをおこらせてしまうてな

そこれまでおかあが言ってくれるのだからありがたい気持ちで呑ませてもらったことが三回ほどあつた。そのやましさを清算するために三万円という大枚

私に断つた。良くも悪くも売名になつたのである。それを見越したのか寺島は「書き残すということにも意味があるんだぞ」とも言つた。その時のその言葉は、今の私の太い骨となつてい

私にはやはり寺島珠雄に罵倒されたのである。それは「おまえ

あ」というと、「あのひと若い子

ええ」

る。

が及ばなかつたという他ない。

かつた。結局一言も発せず部屋

かまへん呑んでき」金はわからんようにてらさんと竹島さんに

は、今の私の太い骨となつてい

清や竹中芳などに引き合わせてくれたのもそうであつた。具体的

をあとにして、八兵衛で軽く呑

わけてつけとくから心配せんでええ」

は、今の私の太い骨となつてい

が及ばなかつたという他ない。

んだ。

る。

は、今の私の太い骨となつてい

が及ばなかつたという他ない。

あ」というと、「あのひと若い子

ええ」

る。

が及ばなかつたという他ない。

る。

が及ばなかつたという他ない。

る。

が及ばなかつたという他ない。

る。

が及ばなかつたという他ない。

る。

が及ばなかつたという他ない。

を見損なった」ということであったろう。おまえという私は大義名分を軽く口にするが、おまえの言う労働者の命とは何なのだ。その短い人生は何ゆえのことなんだ。おまえがやろうとしていたことは「享年」などという言葉で済ませられるものなのか。おまえがやろうとしていたことは「享年」という言葉で適当に済まされようとしている社会というものに対する抵抗と抗議ではないのか。おまえを見損なっていたよ。そういうことだったのだろう。

普段何気なく使っている言葉への軽率さがあふれている。「享年」という言葉を使えば実に學者であり、取まりが良い。あの詩人が、あの評価の高い論者が、人が死ねば使うものだとはいわんばかりに。

寺島珠雄の文章は、実直に正確さが期せられており無駄がない。やむをえない推測にも典拠が確実に示されており、当てずっぽうと呼べるものもない。それは、「享年」などという言葉を縁の、その生きざまと重なる彼の矜持というべきものである。あの時以降、空っぽの私でも「享年」という言葉は使ったことがない。

「反転の論理」その後

前田年昭

寺島さんは『釜ヶ崎 旅の宿りの長いまち』（プレイガイド ジャーナナル社、一九七八年）で『労務者渡世』の誌名由来について次のように書いている。

『労務者渡世』という誌名は、私の到達した感覚に適合していた。だから私はいくつかの案のなかからすぐそれを選んだ。誌名案はNが出したのだと思う。Nは以前から、労働

者なんていいかえりも労務者と自己確認することこそ必要といっていて、私がすでに耳を傾けていたということもある。

（二九ページ）

Nは中原哲也は当時の私の筆名だった。私は当時、労務者は差別用語であり労働者と言ひ換えるべきだという運動の論理に異議を唱えていた。

土方でも社会運動や文筆でも親子ほど年長の寺島さんはやさしく私の話をきいてくれた。二人で何度か話した内容はおおよそ次のようなものだった。

根もとにある価値観の転換がなければ、底上げの言葉の言い換えは、差別の隠蔽と再編成しかもたらさない。それ以上に、当時の私をとらえていたのは、水平社宣言の「我々がエタである事を誇り得る時が来た」とや黒豹党の「ブラック・イズ・ビューティフル」という宣言だった。黒人でも部落民でもない私の心に触れるそれらの誇り高き宣言

にならって、労働者宣言こそが解放の旗印に掲げられるべきではないか、と。

その後、『労務者渡世』を私が離れることを決め話したときに寺島さんは私に尋ねた。

——で、どこへ行くんや？
「党を、労働者の党をさがしに行きます」

私のこの返事に、しばらくの沈黙の後、寺島さんが言った言葉は今も忘れられない。

——ないと思うよ。
その言葉は私の気負いや前衛党論に向けられていただけではない。それまでの経験と洞察にもとづく寺島さん自身の確認だったのだと、今は思える。

それから四半世紀、私はいくつかの自称「前衛党」に加わり生活を賭け、そして敗北した。その顛末報告の再会を果たせぬまま寺島さんは亡くなつてしまった。反省はしても決して後悔することなく生きてきた私だが、これだけはとても残念だ。

何度敗北しようとも私はまだ夢を見ている。夢は昼みるものだ、とは夜間中学廃止反対運動の高野雅夫さんに教わった言葉である。夜みる夢は朝になればさめてしまうが昼みる夢は実現するといわけだ。

寺島さんへの宿題を私はいま結論を先取りすれば、次のように考えている。

根もとにある価値観の転換としての労働者宣言は、歴史と社会に合致した日本社会各階級の分析、すなわち新たな名乗りとして実現されるのではないか。

ある人たちによると現在の日本社会では「労働者階級が八割」だという。一握りの「敵」と「圧倒多数の革命の主力」というわけだ。臍が茶を沸かすとはこのことだ。圧倒多数のはずの「労働者階級」の過半が労働者を蔑む労働者に「成り上がった」(階級的には墮落した!)のために、革命の現在の困難があるのだ。三年前の『蟹工船』ブームはいったい何だったのか。

森崎和江らの『無名通信』はかつて「わたしたちは女にかぶせられている呼び名を返上します。無名にかえりたいのです」と主張したが、資本と国家は「無名」すら商品として消費してしまふ(「無印良品」もまたブランドのひとつである!)。

フリーターという名乗りにかつてのアンコやゴンゾーという名乗りが持っていたほどの力がないのは労働の質の違いもあるだろう。しかしマルチチュードやらプレカリアートなどといわれても私にはしつくりこない。

寺島さんは「社会が悪い」と「個人の責任だ」という二分法と闘い続け、「社会が悪い」一辺倒ともいべき公式左翼と一線を画した文体を持っていた。

『労働者渡世』第五号(一九七五年四月)の「シノグ」特集に對して、『被告団通信』九号が「すっかり個人に解体され、分散され」てしまっているという批判を寄せ、これに応えて第七号

(同年六月)で力を込めて書いている(署名は(て))。

運動や闘争を否定する気は全然ない。そういつたことが、ギゼイ少なく効果多く進められることを希望しているし、自分もその一員である場合もある。だが、そういつたことの基は何かと言えば、具体的に生きていく人間一人一人、つまり個人なのだから、シノグ特集が個人にピントを合せたのは、「解体」や「分散」をおこなったのではなくて、原点に目を向けたことなのだ。

(中略)

運動や闘争というのは、どんな仲間うちの力や知恵やカネの出し合いにも尚限界が見えてきたとき、さらに大きな出し合いの道としてあるのではないだろうか。もつとも、世の中を広く見わたすと、どこか遠くの方で前もってきめられた運動や闘争が、いきなり天下りしてくることもあ

る。しかし、昔の百姓一揆とか、大正時代の米騒動とか考えても、個人めいめいがシノギにシノイで、力や知恵やカネや食いのものを出し合つて、それでもシノゲないとなつた時、爆発したのだと思う。

(三〇―三二ページ)

貧乏が増え格差が大きくなつ今日この頃、過去が現在を支配し、死者の無念が生者を縛る。一握りの「成り上がり」を除いて全国はフクシマー―釜ヶ崎化した。労働者は労働者化した。今や生き方が下手なものでなくてもシノギ難いご時世である。

三五年前、私たちが「労働者なんていいかえよりも労働者として自己確認することこそ必要」と反転の論理を選び取つた意義はいささかも旧くなつていない。古びてしまった「労働者」に代わる名乗りを発見し、貧乏こそ希望と言いつけることができる日は来るのか。寺島さんが生きていたら何と言つたらうか。●

探しもの「ほればなし」

事務局だより

「陽」

早速大阪のKさんから書誌情報が寄せられた。福中都生子主宰（陽の会発行）雑誌『陽』。

福中氏が亡くなられてまだ月日は経っていない。関与した雑誌も多く、膨大と予想される蔵書の方が気になっていた。寺島珠雄が寄稿して何の不思議もない。『大阪』にも一点だけが寄稿が確認されている。この追加情報も欲しい。寄贈先は大阪市立中央図書館かとふんで郷土資料室に直接聞いた。目録でも出ていればと思つた。応答した司書は申し訳なさそうに、本は受け入れさせてもらつたが雑誌類は断らざるをえなかつた、と。同館にはまだ古い未整理の雑誌類が山積みには知つていたが、ため息の出る話である。寄贈先の情報を教えてください。

『陽』は幸い日本近代文学館に全冊保存が確認された。（中岡）

78 「日本の底流」

手元に、「日本の底流」という雑誌が、創刊号から五号まである。創刊号の奥付によると、発行日：

一九七二年三月一日、編集者：日本の底流」編集委員会、発行者：緒方啓郎、発売元：創芸社。

何故こんな話を持ち出したかという、寺島さんから「日本の底流にヤジ馬を紹介した」と聞いた記憶があるからである。

五号二八頁に「京阪神をかけためぐる／ガリ版『ヤジ馬』が掲載されている。問題は、寺島のいう「紹介」の形態。単に編集部に「ヤジ馬」を送つたということなのか、それとも紹介記事を書いて送つたということなのか。毎号の「底流ジャーナル」のコーナーは一貫して無署名だ。従つて、編集者が作文したのか、紹介者が紹介文を寄稿したのか判断できない。「紹介者が紹介文を寄稿した」のであれば、

書誌目録に加える事になる。『ヤジ馬』の発行者久保利明・松繁にとつて、誠に光栄な記録となる。どなたか判断できる材料・情報をお持ちでないであろうか。

情報の提供を、お待ちしております。（松繁）

61 「多喜二と百合子」

『どぶねずみの歌』に「後年、百

合子の死後、所蔵されている百合子の著書を禁書扱いする長野刑務所のやり方について、挑発的な文章を雑誌『多喜二と百合子』にぼくは書いた」（一九〇頁）とある。どう考えても一等史料である。

全冊揃っている日本近代文学館に閲覧に通つた。三度目を通じたが見つからない。「ある」ことは見つけた時点で証明がすむ。「ない」

ことの証明は見落としを懸念するとまたもう一度、とならざるをえないからどうにもこうにも辛いものである。

史料批判ではこれは沈黙の証拠または消極的証拠と呼ぶ。本人が書いている以上「目録」から削除する訳にもいきまい。（前田）

86 「パンティー」

『酒食年表第二』の初出覚えにこの雑誌の記述があつて詩を再編再構成したらしくどの詩がそれなのかわからない。自分ではPCは扱わない主義だから、初動調査はその道のプロ、図書館司書類みとなる。

こんな名前の雑誌を主宰する人物には非常に興味が湧くし中味をぜひ見てみたい。「あー、パンティーという雑誌なんです」「はあ、あのパンティーなんですか」

「はいそのパンティーです」などとやりとりをして画面をのぞくとろくでもないようなものがぞろぞろ出てくる。体をよじつて人が操作する画面に眼をこらすのは難儀である。しつこく続けると下心を疑われそうなので放棄してそのままになっている。所蔵がどこにもないようなので、どなたかご存じありませんか。

パンティと言えば消すことのできない思い出がある。かの昔、釜ヶ崎の数多かつた裁判で先鋭的役割を果たしてくれた弁護士何人かと「ヒンサロ」で大騒ぎして、一人がホステスのそれを脱がせて頭にかぶりしやぎまわつたこと。大恩人のその姿に仰天もしたが楽しかった。

『タタ』にいい言葉を見つけた。「酒を呑んで酔わない奴は人間のクズである」。そのとおりです。風間光作さん。

（中岡）

編集後記

寄贈書報告と刊行会蔵書一覧、会計報告

などは、年内発行予定の次号に。特ダネ(?)ともども刮目してお待ちください。書誌情報だけでなく、これはという思い出話など、皆さんの投稿をお待ちします。

●